私たちを過去とつなぐ「記憶」こそが
現在、未来、そして芸術の創造と密接につながる

芸術と記憶

藝術学関連学会連合第 8 回公開シンポジウム

1st SESSION 13:10-15:15「記憶と表象」

13:00-13:05
主催者代表挨拶
西村清和　（藝術学関連学会連合会長）

13:05-13:10
共催者代表挨拶
山梨俊夫　（国立国際美術館館長）

13:10-13:15
司　会
長田謙一　（名古屋芸術大学）

13:15-13:35
香川　檀　（美学会・武蔵大学）
「漂流の前と後―不在者の縁（よすが）としての写真とモノ」

13:35-13:55
関村　誠　（広島芸術学会・広島市立大学）
「ヒロシマの〈顔〉と記憶」

13:55-14:15
平芳幸浩　（意匠学会/美術史学会・京都工芸繊維大学）
「現代芸術におけるデジャヴュとジャメヴュ」

14:15-14:35
村上タカシ（美術科教育学会・宮城教育大学）
「3.11 メモリアルプロジェクト（のこすプロジェクト）」

14:35-15:15
ディスカッション

2nd SESSION 15:35-17:40「記憶と創造」

15:35-15:40
司　会
藤田治彦（大阪大学）

15:40-16:00
大森正夫　（日本デザイン学会・京都嵯峨芸術大学）
「作法としての空間意匠～月待ちの日本美～」

16:00-16:20
桑木野幸司（美術史学会・大阪大学）
「初期近代西欧の芸術文化における創造的記憶」

16:20-16:40
沼野雄司　（日本音楽学会・桐朋学園大学）
「前衛音楽における形式と記憶」

16:40-17:00
山﨑稔惠　（服飾美学会・関東学院大学）
「服飾における触覚の記憶―『ユルスナールの靴』をめぐって―」

17:00-17:40
ディスカッション

17:40-17:45
閉会の言葉

2013 年 6 月 8 日（土）13:00 - 17:45　国立国際美術館 講堂（参加費 無料）

主　催　藝術学関連学会連合（参加学会：意匠学会 / 国際浮世絵学会 / 東北藝術文化学会 / 東洋音楽学会 / 日本映像学会 / 日本演劇学会 / 日本音楽学会 / 日本デザイン学会 / 比較舞踊学会 / 美学会 / 美術科教育学会 / 美術史学会 / 広島芸術学会 / 服飾美学会 / 舞踊学会　50 音順）
共　催　国立国際美術館・大阪大学大学院文学研究科・科研基盤研究（A）「アーツ・アンド・クラフツと民藝」
お問い合わせ　大阪大学 美学研究室（06-6850-5122 火・木・金曜日）

芸術と記憶

藝術学関連学会連合第 8 回公開シンポジウム

私たちを過去とつなぐ「記憶」こそが
現在、未来、そして芸術の創造と密接につながる

藝術作品はどのようなかたちで私たちとともにあるのだろうか。石の建築や彫刻は制作の時を過ぎてもモニュメントとして永くそこにあるが、その場から切り離された作品はモニュメントというよりはドキュメントの様相を帯びる。かといって、往時のままにあるかのようなモニュメントも、作品そのものではなく、時を経て変質し―あるいは周囲が変質し、その言葉通り「思い出させる」「もの（手段）」でしかないのかもしれない。作品を取り戻すには記録とともに記憶を蘇らせる必要がある。

記憶には個体の記憶、個体が受け継ぐ伝承としての記憶とともに、社会が受け継ぐ制度としての記憶がある。舞踊や演劇は、記録以上に記憶とともにある藝術であろう。楽譜という、より厳密なドキュメントを持つ音楽も、楽譜を超えて、記憶が不可欠な藝術であろう。フィルムやレコードあるいはビデオといった記録媒体を獲得して以来、諸藝術はどう変質したのか。記録媒体が制作媒体あるいは作品そのものとなった映像（映画）はその意味で完全な藝術にも思われるが、映像にこそ記憶は不可欠なのではないだろうか。

服飾や服飾研究において、記録困難な身体の記憶や触覚の記憶はどのように保たれ、伝えられるのか。美術教育においては藝術の記憶はどのような教育的意味を持つのか。また、地域とともにある学会や研究会にとって藝術の記憶はどのような意味を持っているのか。「記憶」は、過去や回想といった言葉と連想されがちだが、個人や社会に直接取り込まれ、媒体なしに瞬時によみがえる「記憶」こそが、実は、現在や未来と、そして藝術の創造と密接につながっている。藝術学関連学会連合諸学会のパネリストが「藝術の記憶」「藝術における記憶」「記憶としての藝術」等について語り合う。

パネリスト＆テーマ

香川　檀（武蔵大学・美学会）
「漂流の前と後――不在者の縁 (よすが) としての写真とモノ」

アートはいかにして個人や出来事を記憶するのか。故人の遺品や顔写真を使用したものに始まり、社会に潜在する記憶の構造の表象へと至る作品を、国内外の現代アートからとりあげ、意味作用の読解を試みる。

東京大学（表象文化論コース）博士後期課程修了。武蔵大学人文学部教授。近著に『想起のかたち』（水声社）

関村　誠（広島市立大学・広島芸術学会）
「ヒロシマの〈顔〉と記憶」

被爆者の肖像画を制作展示する試みの例をもとに、〈顔〉のもつ訴える力、また記憶において果たす機能について考察する。それは、現れの受容から我々がいかにその意味を心に刻み得るかという問題に向き合うことでもある。

東京芸術大学で博士（美術）、ブルゴーニュ大学で DEA、ブリュッセル自由大学で哲学博士の学位を取得。広島市立大学教授。

平芳幸浩（京都工芸繊維大学・意匠学会 / 美術史学会）
「現代芸術におけるデジャヴュとジャメヴュ」

シンディ・シャーマン、森村泰昌、ヴォルフガング・ティルマンスらの作品を取り上げながら、現代芸術におけるイメージと記憶の関係を、デジャヴュ（＝既視感）とジャメヴュ（＝未視感）を手掛かりに考えてみたい。

国立国際美術館主任研究員を経て、京都工芸繊維大学美術工芸資料館准教授。専門は近現代美術。

村上タカシ（宮城教育大学・美術科教育学会）
「3.11 メモリアルプロジェクト（のこすプロジェクト）」

写真、映像、証言、科学的データだけではなく、実際の津波で被災したモノをあえて残すことで、広島の原爆ドームのように、震災の記憶を後世に伝えていくプロジェクトを展開中。コンセプトと行動を報告。

東京杉並区で「学校美術館構想」展や仙台で「観光とアート」などを企画実施。東日本大震災以降は「桜 3.11 プロジェクト」などを展開。宮城教育大学准教授。

大森正夫（京都嵯峨芸術大学・日本デザイン学会）
「作法としての空間意匠〜月待ちの日本美〜」

「わが庵は月待山の麓にて傾く空の影をしぞ思う」。義政が詠んだ一首の面影は、銀閣と東求堂とわずかに残る苑池に頼るしかない。しかし、日本ならではの作法の記憶なくしては現われない「見え」の風景が潜んでいた。

京都大学大学院博士後期課程（建築設計学）修了。（株）環境・建築研究所を経て、京都嵯峨芸術大学教授。

桑木野幸司（大阪大学・美術史学会）
「初期近代西欧の芸術文化における創造的記憶」

初期近代の西欧では、知的創作活動や芸術制作の場面で、記憶が重要な働きを果たしていた。その背景には、記憶術とよばれる情報整理法の流行があった。記憶が創造と切り結ぶ瞬間を具体例を通じて見てみたい。

1999 年東京大学大学院工学系研究科・修士課程修了、2006 年ピサ大学文学部博士課程修了（PhD）、2011 年より大阪大学文学研究科准教授。

沼野雄司（桐朋学園大学・日本音楽学会）
「前衛音楽における形式と記憶」

伝統的な音楽形式は旋律や音形の回帰に力学的なポイントを置いている。すなわち形式の工夫とは短期記憶の操作に他ならない。一方で前衛音楽における形式の探求は、新しい形の記憶のあり方につながっている。

東京藝術大学大学院博士課程修了。ハーバード大学客員研究員（2008-09）。桐朋学園大学准教授。

山﨑稔恵（関東学院大学・服飾美学会）
「服飾における触覚の記憶―『ユルスナールの靴』をめぐって―」

須賀敦子の『ユルスナールの靴』「プロローグ」にしるされた「きっちり足に合った靴」をめぐる言説を紹介し、服飾が触覚の記憶を通して、あざやかに芸術の位相へと変奏してゆくさまをみてゆく。

お茶の水女子大学大学院家政学研究科修了。関東学院大学人間環境学部教授。服飾美学・西洋服飾史専攻。

藝術学関連学会連合第 8 回公開シンポジウム「芸術と記憶」

主　催　藝術学関連学会連合（参加学会：意匠学会 / 国際浮世絵学会 / 東北藝術文化学会 / 東洋音楽学会 / 日本映像学会 / 日本演劇学会 / 日本音楽学会 / 日本デザイン学会 / 比較舞踊学会 / 美学会 / 美術科教育学会 / 美術史学会 / 広島芸術学会 / 服飾美学会 / 舞踊学会　50 音順)
共　催　国立国際美術館・大阪大学大学院文学研究科・科研基盤研究（A）「アーツ・アンド・クラフツと民藝」
日　時　2013 年 6 月 8 日（土）13 時 00 分ー17 時 45 分
会　場　国立国際美術館講堂　〒530-0005 大阪府大阪市北区中之島 4-2-55　http://www.nmao.go.jp/
京阪中之島線「渡辺橋」駅より南西へ約 5 分、地下鉄四つ橋線「肥後橋」駅より西へ約 10 分、JR 大阪駅より南西へ約 20 分 (上記 URL ご参照ください)
参加費　無料

お問い合わせ　大阪大学 美学研究室（06-6850-5122 火・木・金曜日）